

二つの闇夜

——西谷啓治のシェリング解釈（一）——

浅沼 光樹

一 問題設定 —— 回顧と課題

西谷啓治の卒業論文について私はこれまでに二つの論文を発表した。一つは「京都学派の哲学史的洞察——西谷啓治の卒業論文「シェリングの絶対的観念論とベルクソンの純粹持続」と題する論文であり、もう一つは「シェリングと〈純粹意志の哲学〉」と題する論文である。⁽¹⁾

このうち前者は西谷研究の現状をふまえつつ、西谷の卒業論文をとりあげる意義、その際のわれわれの基本的な問題意識などを説明したものであり、本研究全体の序説に相当する。

また西谷の初期論文は難解をもって知られ、特に卒業論

文は論理的構成を明確にとらえるのが非常に困難であった。主にその説明に取りくんだのが後者の論文である。その目的がまがりなりにも達成されたとするならば、それによって西谷の卒業論文の具体的内容について論じる準備は整ったと言ってもよい。

西谷の卒業論文の具体的な内容とは、言うまでもなく西谷によるシェリング解釈である（ただしそれは同時にベルクソン解釈でもあるようなシェリング解釈である）。そこで第二論文を土台とし、いよいよ西谷のシェリング解釈の内実に入り込んでいくことにしたい。

一一 「悪の問題」

西谷は一九二一年に京都帝国大学に入学し、一九二四年に卒業する。卒業論文に先立って第二年度の終わりに書かれた「悪の問題に就いて」(以下「悪の問題」と略する)というレポートが西谷の最初の哲学論文である。のちにこの論文は雑誌『哲学研究』に掲載され、現在は『著作集』第二巻に収録されている。

この論文には西谷の問題意識が端的に示されていると同時に、その構造は或る意味において卒業論文の雛形とも見なしうる。時間的にも主題的にも連続しているこれら二つの論文を合わせて読むことによつて、われわれは卒業論文の意図と特質とをより正確に把握しうるようになる。

二・一 「悪の問題」の構図

「悪の問題」の概要を確認することから始めよう。この論文において西谷は純粹意志の立場に立脚し、悪の起源の問題を論じている。

絶対者は純粹意志を本質とする自覚的存在者である。言

い換えると、それは直観という同一性と反省という分裂によつて織り成される無限の生成発展である。ただしそれ自体として見られるならば、同一性と分裂という二面はこの発展のなかでは相即し、絶対不可分である。

しかし人間においては、絶対者の二面は常に分裂してあらわれる。例えば、知と意志という絶対者においては不可分なものも、人間においては理論理性と実践理性とに分かれない。これら二重の理性はそれ自身は有限なものではあるが、同時に絶対的なものとの関係も失っていない。そこでこのような絶対的なものへ向けて人間理性の反省作用が拡張されるならば、そこに成立するのが哲学的認識であり、その究極の形がいわゆる絶対知(絶対的理性)である。

絶対知とは絶対者の自覚的發展が反省されたものであり、この反省は絶対者そのものの一面を形作っている。その意味では絶対知は絶対者の自己認識そのものでもある。しかし絶対者の本質はここで反省されているもの、つまり反省の内に映されている当の自覚的發展という運動のほうにある。この側面は直接にはわれわれの反省(理論理性)

ではなく、その意志的行為（実践理性）の内にあらわれる。われわれの現実の行為は善と悪との絶えざる葛藤であり、一瞬一瞬が絶対的規範としての神の審判との直面である。われわれの行為は決して完全に善ではありえないのだから、その現実の行為は倫理的であるとともに同時に宗教の希求を伴わざるをえない。つまり前者（倫理）は後者（宗教）への通路ともなっているのである。

したがって絶対的理性の立場の根柢には宗教的実存の立場がある。そうであるからこそ絶対知の立場は自己自身を否定して宗教的直観の立場（知と行為の統一としての純粹意志の歴史的具体化の立場）へと進まなければならないのである。

二・二 ヘーゲル批判

この論文にはカントやライプニッツなどのさまざまな哲学者の引用が鏤められている。なかでもヘーゲルの比重は大きい。絶対知らない絶対的理性について語られるときにははつきりとヘーゲルの立場が念頭に置かれている。

尤もヘーゲルが重視されるのはヘーゲルに欠落しているものに光を当て、その補完の必要性を強調するためである。〈悪の問題〉と〈純粹意志の哲学〉は、反省によって一切のものを覆い尽くすかのように見えるヘーゲルの絶対的理性の立場そのものの彼岸に位置づけられる。確かにその際に一見カント的な言い回しが用いられている場合もある。

実践理性の優位を以て、絶対知にすらも最後の最後の立場が割当てられるとも考えられるのである。(27)

しかし西谷は「カントに還れ」と言っているわけではない。同じことはライプニッツとスピノザの例を用いても説明しうるからである。

このことは、恰も一切の個体を自らの様態へ解消する如きスピノザの実体が、自発性を有するライプニッツの無限なるモナドにまで砕かれた推移に似てゐる。

(29)

したがってカントの図式が用いられているとしても、問題となつてゐるのはあくまでもヘーゲルであつて、その絶對的理性の立場の向こう側へ至ることこそが企図されてゐるのである。

文章の端々から感じられるのはむしろニーチェやキェルケゴールの存在である。カント的図式はあくまでもヘーゲルの理性主義をニーチェの生の哲学やキェルケゴールの実存の立場へと乗りこえるために用いられているのである。

とはいえ、たとえ克服の対象であるにしても、ヘーゲルが論文全体のなかで枢要な位置を占めてゐることに変わりはない。このような仕方では西谷のヘーゲル理解が開陳されるとともに、それについての評価が下されてゐるわけである。その意味ではこの論文は、純粹意志の立場に立つて、ヘーゲル哲学との関係において、「悪の問題」を論じてゐるといつても間違ひではないだらう。

二・三 シェリングの不在

ところが、このようにヘーゲルへの言及が頻繁になされ

てゐる一方で、「悪の問題」にはシェリングの名は一度も登場しない。しかし西谷の議論はシェリングの『人間の自由の本質』を彷彿とさせる場面が少なくない。

悪が伝統的に考えられてきたような消極的なものではなく、積極的なものであるとか、人間が神の似姿であるがゆゑに全体から孤立して、一個の空虚な小宇宙を構成しようという着想はそのまま『人間の自由の本質』にも見出される。もしこの時点で西谷がまだシェリングを読んでいないとするならば、カントの宗教論やベームの『アウローラ』などへの言及も見出されることから、それらを消化した上で西谷が或る程度まで独力でシェリング的な議論を展開しているのかもしれない。

しかしこうした個別的な論点だけにとどまらず、更にヘーゲルの理性主義の克服という全体のモチーフもシェリングの『人間の自由の本質』を連想させずにはおかない。今日では一般に認められてゐるように、ヘーゲルのシェリング批判に対する再批判は『人間の自由の本質』執筆の動機の一つであつた。しかしこれはあくまでも暗黙の前提であり、シェリングのこの著作においてはヘーゲルとの対決と

いう側面はまだ表立ってあらわれているわけではない。

これに対して西谷の場合には、ヘーゲルと自らの立場の関係そのものが主題とされているために、その対決姿勢はシェリングの『人間的自由の本質』の場合よりも一層先鋭化しているように感じられる。ヘーゲルの絶対的理性は悪を反面に蔵し、この反省と悪とは同時に生起するものであるのに、このような事態について盲目であるとか、ゆえにヘーゲルの絶対知の立場は決して最高のものではありえず、悪の問題を介してそれ自身が宗教的直観でもある純粹意志の立場にまで進まなければならないとも言われている。これによつていづれがいづれを包摂しようのかという上下関係がより鮮明に打ち出されている。また行為の現実性の強調や宗教的なものへの希求の念も、こころなしか『人間的自由の本質』の場合よりも遙かに激しいような印象を受ける。次の一文などはその一例と言つてよいであらう。

行為は必ず業的世界より現実に入る。業と罪垢なき行為とは現実ならざる行為といふに等しい。罪なくして人間罪苦の総てを負はれし神の子によつて救済され

る、といはれるのもその為めである。悪の問題は必然的に宗教に導かねばならぬ。(16)

三 「悪の問題」と卒業論文

その問題意識から言つても実際の議論の内容から言つても、このように西谷とシェリングは相当に近いところに居た。それゆえ西谷がシェリングに着目したとしても聊かも不思議ではなく、そうなるのも単純に時間の問題であつたと思われる。事実その後、西谷はシェリングに本格的に取り組み、シェリングはベルクソンと並んで卒業論文の主軸の一つに据えられる。

三・一 卒業論文の構成

まずは卒業論文の概要を簡単に回顧してみよう。この論文は三部構成になっている。

第一部ではフィヒテからシェリングをへてヘーゲルへと至る哲学史の発展が詳細に辿られる。その後でこのような

シナリオとは異なる、いわばありえたかもしれない哲学史の可能性が探られる。それは一言で言えば、シェリングが陥った同一哲学の難点をヘーゲルの的ではなく、フィヒテ的に解決しようとするものである。その手がかりがベルクソンの純粹持続の立場に求められる。

第二部はそれゆえ、その全体がまるごとベルクソン哲学の検討に当てられている。その吟味の結果としてベルクソンの立場そのものの不十分性が暴き出される。ベルクソンは超越論的哲学の方向へとカント化ないしフィヒテ化され、更に同一哲学ないし絶対者の哲学の方向へとシェリング化されなければならないこと、そうして最終的に〈純粹意志の哲学〉へと変貌を遂げざるをえないことが結論される。

そこで第三部では、そのようにして成立した〈純粹意志の哲学〉が改めてシェリングの同一哲学、ヘーゲルの弁証法の立場、シェリングの『人間の自由の本質』との対決を通して次第に彫琢されていくのである。

三・二 同型性と差異

確かにフィヒテ、シェリング、ベルクソンという新しい素材が投入され、それによって議論の面目は一新されている。特に注目に値するのは〈純粹意志の哲学〉はもはやアプリアリに前提されているのではなく、ほとんど一からの導出が試みられているという点である。しかも先程も述べたように、その導出の仕方は、いわば哲学史的演繹とでも名付けうるような極めて独特なものである。つまり、フィヒテからシェリングを経てヘーゲルへと至るドイツ観念論の思想的発展の中でいったんは座礁してしまっただけに見えるシェリングの同一哲学が取り上げられる。これがベルクソンを経由することによって反転させられ、復活を遂げるわけだが、同時にそれはベルクソン哲学の超越論的哲学へのメタモルフォーゼでもある。卒業論文においては〈純粹意志の哲学〉はこのような仕方でも導出されているのである。

けれどもこのように〈純粹意志の哲学〉の立場が一旦成立してしまえば、その後は基本的に「悪の問題」と同様の議論が反復されている。ヘーゲルの絶対知の立場は再度、

克服の対象とされ、その彼方に（悪の起源）の問題が設定されている。卒業論文の第三部にのみ注目するならば、基本的にそれは「悪の問題」と同一の構造をもっているのである。

三・三 同一哲学の再評価

「悪の問題」でもヘーゲルは詳細に論じられていた。そのせい（純粋意志の哲学）とヘーゲルとの関係に関しては、第三部においても同じような議論が繰り返されているという印象は拭えない。しかしその一方で重大な相違も見出される。というのも、西谷の（純粋意志の哲学）と並んで『人間的自由の本質』が、つまりシェリング自身による同一哲学の主意主義的な改造が登場するからである。『人間的自由の本質』は西谷の（純粋意志の哲学）の併走者として共にヘーゲルの絶対的観念論の彼岸に位置づけられるのである。

これらの二つの系列は、同じくヘーゲルの批判に直面することによって分岐した二種類の同一哲学の改造プランで

ある。一方は現実のシェリングであり、他方は西谷自身の（純粋意志の哲学）である。ただし後者はシェリングの同一哲学がベルクソンという迂回路を経由することによって反転させられたものだった。西谷は後者の立場に立ってヘーゲルに再度戦いを挑むわけであるが、現実のシェリングも嘗て密かに同じことを試みていたのである。したがって西谷は今回はヘーゲルだけでなく、シェリングの『人間的自由の本質』をも同時に視野に入れなければならない。

そうだとすると自ずと関心は、西谷によってシェリングの『人間的自由の本質』がどのように解釈され、評価されているのかということに向かわざるをえないだろう。しかしこの問題は種々の意味において余りにも重要であり、別の機会に新たに集中的に論ずるのが適切である。

ここでは西谷の卒業論文におけるシェリングの『人間的自由の本質』の大体の位置づけを確認するにとどめ、もう一つの重要な問題に目を向けてみたい。その問題というのは、西谷の到達した（純粋意志の哲学）の立場からみてシェリングの同一哲学は、あるいは卒業論文のタイトルで言われているように「シェリングの絶対的観念論」は一体ど

のような再評価を、あるいはむしろ最終的審判を受けるのかという問題である。

四 シェリングの絶対的観念論

四・一 同一哲学の難点と

ヘーゲルによるその克服

卒業論文においてはシェリングの同一哲学は二度、つまり第一部と第三部において論じられる。第一部の議論はでさるかぎり客観的に同一哲学を分析しようとする姿勢が見られる。ここではシェリングがヘーゲルによって乗り越えられなければならないかかった経緯が綿密に綴られている。ここではその結論のみを見ておこう。

彼〔シェリング〕は一方に於てフイヒテの、無限に自己のうちに帰りゆく活動に不満を感じ、他方に於て知識学が具体的内容の体系に入り得ぬことを認めた。フイヒテの事行は主客観化 *Subjekt-Objektivierung* であ

ったが、シェリングはこの客観にも主客合一の意義を与へることによつて主観は *subjektives Subjekt-Objekt* となり客観は *objektives Subjekt-Objekt* となり、この二つのものの統一として静的なる絶対者が考えられたのである。かくてフイヒテに於ては永遠に合理化されるべき課題として残つた非合理的なるものも、絶対者の立場に於て非合理のまゝに合理化された。(58-59)

しかしシェリングの同一哲学は理念界と現実界との関係について一つの困難に直面する。

吾々は先にシェリングの「対立の統一」といふ如き考へでは理念界と現実界の関係を説明する事が出来ぬ、主知主義は畢竟対立を単に濁りなき統一を産む為にのみ役立つものと見て、常に統一のみに立つ故、最高の統一に達すればすべてを現象界と考へざるを得なくなる。これが即自的に見れば絶対者のうちにあると言ふも単に経験を二重にするにすぎず、皆闇のなかの牛の如く一色のものとなるを免れぬといふことを見た。

(57)

四・二 ヘーゲルの問題点

このような困難に直面してヘーゲルは次のように対処した。

ヘーゲルは、如何に一切が絶対者のうちにありその影像であるとしても「…中略…」更にこれ等のものをその絶対者との内面的関係より見なければならぬ「…中略…」真の絶対者は同一と非同一定の同一でなければならぬ、即ちイデーを動的に考へることによつて、所謂現象の間にイデーの発展による内面的連関を現出せしめ、同時に絶対者と現象界をイデーの自己復帰によつて繋がねばならぬと考へた。「…中略…」かくしてヘーゲルには仮相としての現象界はなくなつてすべてがイデーの発展となつた。(52-53)

しかしまさにこの解決が第三部では別の観点から再検討されているのである。

確かにシェリングの同一哲学は一つの困難へと陥つた。そのことは否定しえない。けれどもヘーゲルの解決は全面的に正しかったのであるうか。この問いに対する西谷の答えは二義的である。というのも西谷によると、それは或る意味では正しく、或る意味では間違つていたからである。

難点の解決という面から言えば、それは間違ひではない。この意味においては「ヘーゲルの理性は主知的立場より見てより純粹である」(82)とすら言いうるのである。しかし他面シェリングとの関係で言えば、それは必ずしも正しいとは言えない。「ヘーゲルはこの同一と更に対立する非同一定の同一を考へたが、同時にかくしてシェリングの動機を無視した」(50)からである。

何となればヘーゲルはシェリングの絶対的立場に於て、後者が純粹なる *Differenz* を殺し、これを含むものを一切現象界に追つた飛躍的立場を再び現象界に接続するのである。これは当然であつたかもしれぬが、

これによつて一方絶対者の超越性と他方非合理的なるもの意義とが失はれたことも争へぬ。かくして無限なる過程が再び現れ、同時に閉合的体系が建設された。

(59)

シェリングの絶対者を譏つて現実的なるもの、うちからも絶対者が現はれねばならぬと考へたヘーゲルの絶対者は、現実界に働くと共に現実界と関係に入ることによつて濁らされた。(50)

ここで西谷はヘーゲルの解決の問題点をシェリングの動機の無視という言葉で言い表わしている。「動機」という言葉は単に同一哲学の成立の動機という意味だけで使われているのではない。既に見たように「非合理的なものを非合理的なままに合理化する（非合理的なものを非合理的なままに包みうる）」というのは、そもそも最初からシェリング哲学の根本動機であつた。したがつてフィヒテの自我哲学にシェリングが自然哲学を対立させた際の意図までも含めて、ここでは「動機」と言われているのである。われわれはこ

こから、シェリングの思想的発展を前期から後期にかけて一貫した動機ないしは動向に貫かれたものと見なす西谷の姿勢を読みとることができるかもしれない。そのような意味での動機を無視し、シェリング哲学の本来の動向とは別の方向へとヘーゲルは同一哲学を改変したと、ここでは言われているわけである。

しかしヘーゲルによる同一哲学の改変の方向がシェリングの思惟の軌道に沿ったものでなかったというのならば、むしろそのような本来の軌道に沿った同一哲学の改変というものも考えうるのではないだろうか。実際、西谷はその可能性について語っている。

弁証論がその〔ヘーゲルの〕哲学の性質を最もよく語るものである。ヘーゲル自身の言葉をかりれば否定の否定としての肯定がその *Leitmotive* であつた。併し否定の否定は直ちに真の肯定とはならぬ。〔…中略…〕シェリングの絶対者はそのヘーゲルに非難された点に於て反つて肯定の立場を残して居たのであるが、それが静的に考へられた以上、ヘーゲルへの移りゆきは当然

であつた。併し一方に於てシェリングが後に主意的立場に發展し得たのも正にこの非難された考へ方によつて可能であつたと思はれる。(59)

ここでは二つことが言われている。一つは、シェリングの同一哲学はその難点を自身で克服する可能性を秘めていたということである。もう一つは、その可能性はヘーゲルが同一哲学の弱点と見なした正にその点にあつたということである。しかしもしそうならばヘーゲルは産湯(シェリングの弱点)とともに赤子(主意的立場への發展の可能性)までも一緒に流してしまつたということにならう。

ではシェリングの弱点が『人間的自由の本質』への發展の可能性でもあるというのは具体的には一体どのようなことなのであろうか。実際に同一哲学は『人間的自由の本質』へと展開しえたわけだが、その潜在能力は同一哲学のいつたいどのような点に潜んでいたであろうか。

四・三 絶対的同一性の深淵

「悪の問題」と同様に卒業論文においても、絶対的理性は「純なる意志」の「反省面であり、すべての対象界に働く作用をすべての対象界に面する反省面に於て表はす」(75)と考えられている。「理性は道徳・芸術その他のすべての世界に働く意志の反省である故、善も美もすべてが知識のうちに入り知識が知識自身に帰つて哲学が完成」(82)し、「そこではすべては思惟又は意味の世界に移され、恰もバークレーの觀念論に於ける如く直観の外端を一步出づれば虚無あるのみであるかの如く見える」(70)のである。

しかしよく見ればそこには意志の痕跡、つまり理性を超えたものの痕跡が見出される。というのも、「意志は哲学的反省の世界のうちに於ても即自と対自との切れ合ふ点に動的な原理として自己を顕はす」(93)からである。とはいえ「即而対自といふも既に反省的綜合の跡にすぎない」(94)。つまり一方では「既にこの即自と対自との結合が可能なるために、不可分なる或るもの」「純なる意志の働きそのもの」「を予想せねばならぬ」(93)のであるが、しかし他方では「表より裏へ行くには円の全周を通らねばな

らぬ」(86)のである。けれどもそれは要するに、直接に裏側へと行くことができない、ということに他ならない。

これに対してシェリングの場合は事情が違っている。西谷はシェリングの絶対的同一性について次のように述べている。

吾々は嘗てシェリングに於て全無限界の核心である概念の無限のうちには於ける有限を表はす中間帯に更に限界なき実在性、限界そのもの即ち、現実の現実及び両者の結合を見た。「…中略…」この限界そのもの或は現実の現実といふ如きものに吾々は無限の深淵を見る。

それは全無限界に於ける核心的無限者の内に包蔵された有限者の中心、その有限者の有限性であり、無限者に含まれた有限の種子であり、全無限界の根柢深く下された切断である。そしてこの切断より湧出する力から一切の創造が行はれるのである。「…中略…」恰も蓮華水中にあるときは蓮華、水を出づれば荷葉団々といふに似て、この限界そのものといふ無の一線より湧き上がる力が次第に高き立場に於て大なる世界を構成し

て行く。(87)

ヘーゲルにおいても創造の源泉とも言うべき根源的分裂の痕跡は見出される。といつてもそれはあくまでも痕跡であり、どこまでも反省面に映されたもの、「悪の問題」の言葉を借りれば、いかに巧みに描かれてはいても所詮「画面」(二)に写されたものであった。そのようなものを潜り抜けて彼方側へと行くことはできない。ところがシェリングの場合にはそれが可能なのである。

直観のうちに一つに結ばる、realとidealの両面の間の分裂線——この分裂が直ちに深淵である。こゝに立つて、対象と作用、直観と思惟、現象界と理念界等すべての分裂を覗き得る——を。古人は溪聲を指して「這裏より入れ」と教えた。(70)

ではシェリングのこの同一性の深淵は一体どこに通じているのであろうか。

四・四 二つの闇夜

西谷もしばしば引用しているように、ヘーゲルはシェリングの絶対的同一性を「すべての牛が黒くなる暗夜」と呼んでいた。シェリングの絶対的同一性に根源的分裂の深淵を見出すのと平行して、この暗夜の比喻に関しても別の見方が提起されなければならない。

西谷が先の「すべての牛が黒くなる暗夜」に対置するのは「古鏡未だ磨せざる時天を照し地を照す、磨して後は黒きこと漆の如しといふ時」の「かゝる黒き鏡」(94)である。

ヘーゲルの絶対者はもはや「すべての牛が黒くなる暗夜」ではなくして「天を照し地を照す」ものであった。すなわちそれはあらゆるものを自分自身の内に映す絶対的反省であった。しかしそれを西谷は「未だ磨せざる」「古鏡」であると言っているのである。

ヘーゲル自身には「未だ磨せざる」という観点などあるはずがない。「天を照し地を照す」鏡、つまり万物をその内へと映す絶対知こそがヘーゲルにとって最後の、そして

最高の立場だからである。だがその先があるとしたら、それを更に磨いていけば、一体どのようなことになるのだろうか。

再び闇が訪れると西谷は言う。ただしその闇は「磨して後は黒きこと漆の如し」と言われる漆黒の闇である。それは闇夜ではあるけれども、漆のような光沢のある闇夜、デイオニシウス・アレオパギタの「輝く闇」である。絶対的同一性の深淵、根源的分裂の亀裂からはこのような闇が輝き出しているのである。

西谷が強調しているように、ここまで来るとそれは最早「シェリングの絶対者の如きものではなくして反つて自我の奥底である」(94)。つまり、このときわれわれは絶対知の立場から純粹意志の立場に、反省的理性の立場から現実的行為の立場に完全に移行してしまっているのである。既に「悪の問題」においても次のように言われていた。

かゝる瞬々の純粹なる行は神にも属せず、勿論時間のうちに移された限りの自我にも属しない。神と人とのかかる罅隙より「神性」Gottheitの闇黒が覗き、輝く

闇が発現して来るのである。(35)

したがって今やわれわれは西谷の「純粹意志の哲学」の立場あるいは『人間的自由の本質』へと赴かなければならないのである。

このようにしてわれわれは絶対的同一性という根源的分裂の深淵を潜り抜けることよつてシェリングの前期哲学から後期哲学へと到りうる。それゆえ『人間的自由の本質』はヘーゲルに対する唐突なアンチテーゼではない。それは同一哲学のさらなる進展なのであり、このような進展の可能性を同一哲学は内蔵していたのである。

絶対的理性の世界に於て最初のものは寧ろヘーゲルの考へた如き論理の無限界であり、實在の有限界はその後に現はれるものと思ふ。シェリングに於てこの順の逆であるのは、その絶対者がヘーゲルのそれと異つて、第三なる即而对自としての永遠者のみならず、一面すべてを超越して唯自己のみを直観する超越的意味を有して居た故であらうが、もしこの意味を含めて絶対者

を考へれば意志の如きものにならねばならぬ。(81-82)

この可能性ないし力はヘーゲル哲学とは異質なものの、シェリング哲学に固有のものである。西谷は最初から、つまり、非常に逆説的な言い方になるが、いわばシェリングを読む以前からこのことを知っていたように思われる。「悪の問題」の印象的な言葉はその証左とも見なしうるであらう。

原初的分裂を惹き起すことよつてあらゆる分裂の源となる非合理性の極は、すべての合理化に先立つ。真のNaturはヘーゲルの Meinen 以前である。(13)

五 解釈史のなかで

西谷は一九〇〇年生まれであり、既に述べたように「悪の問題」は一九二三年の二月に、卒業論文は翌年の一月に書きあげられている。一九二〇年代のこの時期には、現在もなお必読とされている古典的な研究が相次いで刊行され

ている。エルンスト・カッシーラー『認識問題』第三卷（一九二〇年）、リヒャルト・クローナー『カントからヘーゲルまで』（第一卷、一九二二年、第二卷、二四年）、ニコライ・ハルトマン『ドイツ観念論の哲学』（一九二三年）である。

その頃、既に新カント派の自己解体は始まっていた。これら三つの著作は、それが次第に顕在化しつつある最中に成立し、いわばその徴表という意味をもっていた。ポスト・新カント派の時期を迎えて、カント以後の哲学の発展が再び繰り返えされようとしていた。ハンス・ゲオルク・ガダマーは西谷と同年の生まれである。その場に居合わせた歴史の証人として、後年になってから往時を回顧して、彼は次のように語っている。

一九二二年、リヒャルト・クローナーの大著『カントからヘーゲルまで』（第二卷は一九二四年）が世に出たとき、当時の哲学の主流であった新カント主義の危機が、哲学的・歴史的研究という形式において、初めて世間の前に完全に明らかになった。たしかに、ヴェインデルバントとリッカードに導かれる西南ドイツ学派に

しても、すでにかなり前から、かれら自身の主眼点——それは自然科学ではなく「文化科学」に置かれていた——が、カントを超えてヘーゲルを復興することにおいて、いつそう深く裏書きされるだろうとは意識していた。「…中略…」一門中、最強の思弁的才能であったエーミール・ラスクは、ともかくフィヒテに向けて歩を進め（…中略…）た。しかし彼が第一次世界大戦で倒れたのちは、クローナーの著作がこの課題の間接的歴史的継続を意味した。

これと同じころ、マールブルク学派の新カント主義にも、新しい転機が準備されていた。長老ナートルプは、非具象的なものの体系的再構成を、ほとんど新プラトン派的なスタイルで試みた。カッシーラーの認識問題史には、ヘーゲルが中心となる第三の書を予示する徴候があった。そしてマックス・シェーラーの現象学的「実在論」に魅了されたニコライ・ハルトマンは、たしかに観念論の壮大な体系的構築物に対して距離を置こうとしたが、それにもかかわらずクローナーの著作からもっとも深い感銘を受けたのであった。^④

ところがこのように述べた後で直ちにガダマーはクロウナーのドイツ観念論解釈に一つの問題点を指摘する。

それにもかかわらず、クロウナーはその大著において
はまったくのヘーゲル学派である。じじつ、哲学の思
考をフィヒテへ、シェリングへ、そして最終的にはヘ
ーゲルへと追いやったものもろの問題や難題の、クロ
ウナー自身による展開は、たとえすべてが自主的に考
え抜かれ、新しく言い表わされたものであっても、ま
ったくヘーゲルの観点を出ることがなかった。クロウ
ナーの叙述の全体を規定したものは、ヘーゲルによっ
て導入された「主観的、客観的、絶対的観念論」のシ
エーマ〔…中略…〕であった。^五

ところがガダマーによると、このシエーマは「実際には
事柄に即応しない」のである。そうだとするならば、もし
このような図式を墨守しないのであれば、他にどのような
選択肢があるのだろうか。クロウナーに欠落しているとき

れる脱ヘーゲル的な観点はどこに求められるべきなのであ
ろうか。ガダマーは次のように続ける。

クロウナーはシェリングの『人間の自由の本質』およ
びその後期の、まだすこぶる不十分な神知論的結論
のなかに、ヘーゲルの綜合を制限する真理の契機がひ
そんでいるかもしれないなどは考えてもみななかつ
た。近時のシェリング研究の問題提起——まずパウ
ル・テイリツヒやエーリヒ・フランクによって言い出
され、次いでヴァルター・シュルツの著書以来、観念
論の完成の問題として討論される問題提起——は、本
来クロウナーの準備するところではなかつた。キルケ
ゴールは彼の視野視界のなかに、実際には入ってこな
かつた。^六

ここでガダマーはヘーゲル自身に由来するドイツ観念論
の発展の図式に、後年のシュルツの『後期シェリングにお
けるドイツ観念論の完成』（一九五五年）という図式を対置
してみせる。しかしこれによってガダマーは救いのような

い時代錯誤を冒しているというわけでもない。というのも、引用の最後の文章はクローナーではない誰かによってこのような着想が準備されつつあったことを示唆しているからである。テイリツヒやフランクによって言い出され、シュルツによって一つのテーゼにまで仕上げられたこの着想を用意したのは誰であったか。ここでは明言されていないものの、それがハイデガーであるのはほぼ間違いない。同書の別の箇所では、次のように言われている。

ハイデガーが『存在と時間』を書いていることは、われわれにも察せられた。折りにふれての言葉がその前触れであった。ある日は、シェリングの演習で、「生そのものの不安が人間を中心から追い出す」という命題を挙げ、「この命題の深さに比肩できるヘーゲルの命題をただ一つでもよいから述べよ」とハイデガーは言った。⁵¹

ガダマー自身の記憶が曖昧であるため、この「ある日」がいつであるのか正確には特定できない。しかし最近の研究

究⁵²はハイデガーの最初のシェリング演習をその有力な候補としている。この演習は一九二七年から二八年の冬学期にマールブルクでおこなわれたのだった。

いずれにしても、ここでガダマーが指摘しているように、新カント派の崩壊の最中にドイツ観念論が再評価されつつあるにしても、その復興の道筋は嘗てのヘーゲル自身の発展の図式を単にそのままなぞるだけのものではありえなかった。シュルツがガダマーの高弟の一人であることを考え合わせるならば、この構想はハイデガーからガダマーへと受け継がれシュルツにおいて結実したと見なすこともできらるだろう。

もちろんだからといって彼らがヘーゲルを軽視していると考えるならば、われわれは誤りを犯してしまふだろう。彼らがいずれもヘーゲルを高く評価していることは彼ら自身の仕事をみれば一目瞭然である。ドイツ観念論の真の完成者としてシェリングを再発見するというのは、クローナーに典型的に見られる歴史観があるからこそ初めて意味をもつとも言いうる。ヘーゲルがドイツ観念論の運動において高き嶺として聳えていなければならないほど、それだけ一層シエ

リングによるその超克は重要性を増すのである。

さて、ヘーゲル哲学の復興という新しい動向をふまえても後期シェリングの再評価にまで進もうとする点において、西谷のドイツ観念論解釈は、確かに一面では時代の趨勢に合致している。つまり、それは新カント派の凋落からクロローナーのヘーゲル再興を経てハイデガーの『存在と時間』へと向かいつつある時代の流れに掉さすものと考えられる。フライブルクから帰国したばかりの田邊がいきなり西谷の卒業論文を読み、衝撃をうけた理由もわかるような気がする。しかし田邊のことはともかく、このような諸事情を勘案すれば、西谷のシェリング解釈をハイデガーやヤスパースなどの同時代の同種の動向と比較考察し、それぞれの特徴を炙り出すのは単に興味深いというだけではなく、是非とも取り組まなければならない重要な課題であろう。またそのような作業はおそらく彼らの共通性のみならず、その間にある微妙な差違をも浮かび上がらせるにちがいない。

しかしながら差違ということ言えば、既に看過しえない相違がある。つまり、西谷にはあつて彼らにはない論点

が見出される。『人間的自由の本質』に注目するという段階をふまえて、更にそこからシェリングの前期哲学を見直していくというような論点は、彼らにはまだ見られない。

『人間的自由の本質』がヘーゲルの理性主義を乗り越えていくものであるとしても、そこから翻って同一哲学期においても両者の相違をあぐまでもシェリングの優位において考え、主張するということはおこなわれていない。その意味において、クロローナーに対するハイデガーの姿勢と重なりあう一面はあるとしても、西谷のシェリング解釈にはまぎれもなく彼独自のものが、言うなれば一種の先進性と徹底性が見出されるのである。

もつとも西谷のこのような解釈が奇を衒つたものであるかといえ、必ずしもそういうわけではない。むしろその解釈は、論理的に考えるならば自ずと導き出されてくるような種類のものである。ではそうすると、このような西谷の解釈とも響き合うようなシェリング解釈は、ヨーロッパの思想史の一体どの時点において登場することになるのだろうか。ここでは詳述はできないけれども、ジル・ドゥルーズの『差異と反復』（一九六八年）がそうだったので

はあるまいか。『差異と反復』をシェリング解釈と見なすというような到底一般的とは言えない見解については色々説明が必要になるだろう。しかしここでは単なる指摘にとどめておく。というのも、西谷の同一哲学の独特な解釈が成立するにあたっては同時に別の要因も作用しているからである。それはベルクソンである。言うまでもなくベルクソンはドゥルーズの思索の重要な源泉の一つであった。

六 おわりに —— 総括と課題

西谷のシェリング解釈の第一の特徴は後期思想、さしあたり特に『人間の自由の本質』に注目し、それを高く評価する点である。第二の特徴はこの著作を、あるいは一般に後期思想を前期思想との密接な連関において、言ってしまうえば前期思想との統一性において理解することである。もしシェリングの後期哲学における思惟の特徴が彼本来の資質の発現であるとするならば、それと同じ特徴が既に前期にも見出されなければならないのである。この問題は研究的には、シェリングの思惟の統一性に基づくその思想的

発展の時期区分を見直しの問題と言い表わすことができるであろう。

さてここで注目すべきなのは、このような二段階のプロセスが同時にヘーゲルの哲学史の図式からの脱却を進める二段階のプロセスにもなっているということである。というのも、第一に後期思想に着目することによって、少なくともシェリングの後期の思想はヘーゲルの枠組から外されなければならない。しかしそのようなヘーゲルの歴史的枠組の外部にあるシェリングの後期思想と前期思想が一体的ないし連続的であるとするならば、今度は前期思想までもがヘーゲルの枠組から剥れ落ち、結果としてシェリングの思惟の全体がその解釈のために別の哲学的な枠組を要求してくるからである。

本稿が見てきたのはあくまでも西谷のシェリング解釈の一部である。しかし西谷の同一哲学の解釈に限ってみても、それが決して同時代の動向に遅れをとっていないどころか、ある意味では一歩先んじていることが見てとられる。けれども西谷のシェリング解釈の独自性はこれだけにとどまらない。というのも西谷には、ハイデガーやヤスパース

などのポスト・新カント派の人々には見られないもう一つの論点が、つまり、シェリングの同一哲学を単にヘーゲルとの関係において考察するというだけでなく、同時にベルクソンとの関係において考察する、という論点が見出されるからである。しかもその考究は詳細かつ徹底的であり、このような考究がこの長編論文全体の中盤を占めているのである。

実を言えば、本稿で明らかにしたような西谷の同一哲学の解釈は彼のベルクソン解釈とも決して無関係ではない。そこで次にベルクソンについてどのような解釈を西谷が展開しているのか、それとこれまで見てきたようなシェリング解釈がどのように関係しているのかを引き続き検討することにした。

註

- (一) 前者は『近世哲学研究』第一八号（近世哲学会編、二〇一四年）、後者は『シェリング年報』第二五号（日本シェリング協会編、二〇一七年）に所収。
- (二) 以下、西谷からの引用は『西谷啓治著作集』第二卷（創文社、一九八七年）を使用し、頁数のみを記す。

- (三) このうち卒論にはクローナーの書の記載がある。
- (四) 『ガーダマー自伝——哲学修業時代』 未来社、一九九六年、二九六・二九七頁
- (五) 同書、三〇〇頁。
- (六) 同書、三〇〇頁。
- (七) 同書、二六〇頁。
- (八) Cf. *Heideggers Schelling-Seminar (1927/28)*, Herausgegeben von Lore Hühn und Jörg Jantzen, Frommann-Holzboog: Stuttgart-Bad Cannstatt, 2010, S. 289ff.

Die Nacht der absoluten Identität

— Die Bedeutung von Nishitanis Schelling-Deutung —

Kouki ASANUMA

In den frühen 1920er Jahren belebte sich das Interesse an Hegel mit dem Niedergang des Neukantianismus wieder. Richard Kroners großes Werk *Von Kant bis Hegel* (1921, 1924) war ein Beispiel dafür. In dieser Schrift stellte Kroner die innere Notwendigkeit der Entwicklung von Kant zu Hegel heraus. Dadurch wurde sein Buch ein bedeutendes Dokument zum Aufstieg des Neuhegelianismus.

In seiner Darstellung dieser Entwicklung folgt Kroner einem Schema, das Hegel entstammt. Nach Hegelscher Ansicht erreicht die ganze nachkantische Entwicklung des deutschen Idealismus ihren höchsten Punkt in seiner eigenen Philosophie.

Aber dieses Schema ist problematisch. Denn es gibt noch andere Weisen, dieselbe Bewegung zu sehen. Zum Beispiel lässt es sich denken, dass sich die deutsche idealistische Philosophie nicht in Hegel, sondern in der Spätphilosophie Schellings vollendet hat.

Erst später in seiner Habilitationsschrift (1955) formulierte Walter Schulz diese Idee in einer These. Nach Meinung seines Lehrers Hans-Georg Gadamer findet diese Konzeption dennoch ihren Ursprung schon früher in Martin Heideggers erstem Schelling-Seminar (1927/1928). Auf diesem Seminar hörte Gadamer Heideggers beeindruckende Worte, mit denen er Schellings Freiheitsschrift (1809) höher schätzte als Hegels Philosophie im Ganzen.

Im selben Jahr wie Gadamer, d. h. im Jahr 1900 wurde Keiji Nishitani in Japan geboren. Im Jahr 1924, in welchem der zweite Band von Kroners *Von Kant bis Hegel* erschien, schloss Nishitani sein Studium an der Kaiserlichen Universität Kyoto ab. Seine Diplomarbeit behandelte hauptsächlich das Verhältnis von Schelling und Henri Bergson. Aber im Verlauf der Argumente wurden auch einige wesentliche Unterschiede zwischen Hegel und Schelling hervorgehoben.

Es ist bemerkenswert, dass Nishitani in dieser Abhandlung einen ganz ähnlichen Standpunkt wie Heidegger vertritt. Auch Nishitani legt besonderen Wert auf die Freiheitsschrift Schellings als einen Versuch der Überwindung des Hegelschen Rationalismus.

Nishitani geht noch einen Schritt weiter. Während Heideggers Interesse damals auf das Verhältnis der Freiheitsschrift Schellings zu Hegel beschränkt war, richtete Nishitani seine Überlegung ferner auf die Herkunft des mit dieser Schrift explizit werdenden Gegensatzes beider Denker.

Für Nishitani ist es keine Überraschung, dass sich Schelling in seiner Freiheitsschrift als Kritiker an Hegel zeigt. Denn der Keim für seine spätere Entwicklung kann schon in seiner Frühphilosophie, d. h. der sogenannten Identitätsphilosophie gefunden werden.